
多久真の見た世界

南の二等星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

多久真の見た世界

【Nコード】

N6324J

【作者名】

南の二等星

【あらすじ】

天才エリート中学生『神島多久真』は、出来損ないの妹『真理華』の良き理解者。真理華の誕生日を田舎の湖で過ごしたその帰り、電車の券売機から出てきたのは奇妙な青い切符。

電車に乗り込み、眠りから覚めると真理華の姿がない。しかも辿り着いた先は多久真の知らない世界だった。

第一章 ハッピーバースデー（前書き）

初めまして。不定期更新です。短編〜中編になる予定です。行き当たりばったり設定です。

第一章 ハッピーバースデー

『かみしま神島 たくま多久真』を知ってるか？ 僕のことさ。

いきなりだけど、僕は天才だ。

頭の良い、上品な子供たちしかいない、有名な私立中学へ入学したのは三年前。テストの成績は常に学年でトップ。学級委員を担い、催し物ではクラスのみんなを先導し、先生たちからの信頼も厚い。運動においてもピカイチさ。所属してるサッカークラブでは主将を務め、去年はチームを全国までつれていった。学校行事のスポーツ大会では100m走をぶっちぎりで走り抜け、校内記録どころか、全国の記録さえ大きく塗り替えてやった。

四歳の時から英才教育を受けていた僕は、ピアノやバイオリンといった音楽にも精通し、数々の大会で優勝している。

英語、フランス語、中国語を小学生の時にマスター。普段家にいる時は、パパ選りすぐりの優秀な家庭教師に大学受験レベルの勉強を教えてもらっている。もちろん、ゲームや漫画とかいう庶民的なものには手を出さない。パパはゲームの代わりにカメラを、ママは漫画の代わりに広辞苑を僕に持たせた。

僕は趣味で風景写真を撮影したり、天気の良い日にはスケッチをしによく電車に乗る。ストレスの多い世の中だ。誰もいないド田舎へ足を運んで、のんびりしようってわけ。でもそんな時、パパはよく自分の専属ドライバーを使わせたがる。電車なんて自由が利かないし、人で溢れて窮屈だと言い張るのだ。

パパはデザイナーで、大手デザイン会社の社長だ。嫌いなものは束縛、好きなものは自由。

ママがパパの貯金でなんとなく始めたマッサージサロンは、今や

全国区にチェーン展開するほど大きくなり、地方からの来客も後を絶たないって、つい最近教えてくれた。嫌いなものはセールス、好きなものはこの僕だ。

おっと、勘違いしないでくれよ。僕もママのことを好きだけど、マザコンってわけじゃないからな。

さて、今日は特別、神島家の秘密を教えてあげよう。

実は神島家にはもう一人、家族の一員がいる。僕の妹だ。名前は真理華^{まりか}。小学六年生。

なぜ特別かというと、真理華はパパとママの間で、いないことになってる。理由は簡単。『出来損ない』だからだ。

初めに言っただけど、僕は天才だ。エリートだ。けど真理華は違った。

真理華は臆病で引っ込み思案、家にいがちだったので体も弱く、病弱だった。決定的なのは、頭がすこぶる悪かったことだ。言われたことは守れないし、同じ失敗を繰り返した。テストの点数ときたら、主要教科を全部束にしても、僕の足元にも及ばないほどだった。真理華はパパのイライラの種だ。実は、パパの嫌いなものがもう一つ……それは真理華だった。ママはパパほど教育熱心ではなかったけど、パパは違った。呼び集めた家庭教師を1ダースほど真理華の部屋へけしかけたが、真理華の愛想の悪いこと……家庭教師たちはみなプライドを折られて退散していく始末だった。そんな教師たちを慰めてあげるのは、僕の日課の一つになっている。

一度、パパは抗議の電話を学校へ入れたことがある。僕はその時の様子を陰で見ていたが、パパときたら、節分の鬼も顔負けの赤ら顔と形相で、それはもう悪夢のようだった。

でも誤解しないでほしい。僕はパパほど真理華を嫌ってはいない。ちよっと不思議に感じてる程度だ。僕みたいな天才と本当に同じ血

が通っているのか、と。だってそのとおりだろう？

そんな妹、真理華の手を引いて、僕は今日、抜けるような青空の下へ飛び出した。いつもの駅、いつもの券売機で切符を買い、真理華と一緒に改札を通った。今日は日曜日。駅のホームに滑り込んでくる電車の中は人で溢れていた。

「僕の手を離すなよ」

ドアが開き、中の人間たちが吐き出されるのを観察しながら、僕は真理華に言い聞かせた。真理華は麦わら帽子の下で、ただコクリとうなずいた。

「写真を撮って、絵を描くんだ。空とか、川とか、牧場とかね」

空いた席にうまく真理華を座らせると、僕は使い込まれたスケッチブックを目の前でヒラヒラさせながら説明した。僕の趣味に真理華を付き合わせるのは、実は今日が初めてだった。

なぜ今日は一緒かって……それは、やっぱり今日が特別な日だからだ。

「おいで」

電車が目的の駅に着いたのは、それから1時間以上も後だった。僕は真理華の小さな手を握って、もうすっかり人の気もなくなった車両を後にした。ホームには僕たちしかない。雑草や苔のむした足元を踏みしめ、セミがやんやと鳴きわめく只中を、僕らは改札口を目指して歩いた。

「こんにちは」

改札で切符を手渡す際、僕は駅長さんに挨拶した。礼儀を重んじるのが僕のやり方だ。それに、ここの駅長さんとは何度か話したことがある。背がヒヨロリと高く、シャベルみたいな細いアゴが特徴的だ。無口だが、朗らかな笑顔がパパに似て豪快だった。

「やあ。……初めまして」

駅長が真理華を見つけてそう言った。真理華はうつむいてスニーカーの先を睨んでいた。

しまった。僕はとっさに笑顔を装った。

「僕の妹の真理華。人見知りが激しくて。……カワイイでしょう？」

駅長の笑顔を背に、僕らはそそくさと駅を出た。駅前の砂利広場は夏の日差しに包まれ、すぐ脇を走るコンクリート道路は熱を帯びたフライパンさなだった。駅の周囲には線路が一本、地面を這っているだけ。僕の背丈よりも高い草が茂っていなければ、きっと地平の彼方まで見渡せたはずだ。

「さあ、今日はずっと遠くまで行くつもりなんだ。……遠くって言うっても、すぐ近さ」

真理華が不安げに目配せするので、僕はなんとかごまかした。

「コンデジ、貸してやるよ」

僕は使い古しのデジタルカメラを真理華の手に押しつけ、かいつまんでシャッターの切り方だけ教えてやった。これを与えたのは正解だった。真理華はいささか気分を良くしたようだ。車通りの少な

い、並木の木陰になっっている道路の端まで行くと、真理華は不器用にカメラを構えたまま、僕を置いてぐんぐん歩いて行った。

「こういう所はね、どこかに素晴らしい景色が転がってるんじゃないかって、それを探しながら歩くんだよ。ほら、あの木を見てみろよ……ねえ、聞いてる？」

驚いた。軟弱な体に羽でも生えたようだ。靴底を焦がすような道路を、あの引きこもりで運動嫌いな真理華が無我夢中でひた歩いている。何かに取り憑かれたんだろうか。

そうして20分も歩いた頃、相変わらず跳ねるように歩き続けた真理華が急に立ち止まった。僕は祖父から譲ってもらった一眼レフカメラで天を貫く入道雲を撮影していたが、真理華が足を止めるのを見て、そちらへ素早く被写体を合わせた。

「どした？」

カメラのレンズ越しに僕は聞いた。犬のクソでも踏んだのだろうか？ それとも、いきなり歩き過ぎだもんで、歩き方を忘れてしまったのかも。次の瞬間、真理華は生い茂る草地の中へ姿を消した。

「……………真理華！」

僕としたことが、ほんの一瞬、呆気にとられてしまった。後を追う頃には陰も形もない。僕はカメラを持ったまま壁のように立ちふさがる茂みの中へ突撃した。

「真理華！」

鋭利な葉が頬を切りつけるのを無視し、コバエの群がる気味の悪

い花を蹴散らし、クモの巣をなぎ払い、僕はその名を呼び続けた。
すると突然、視界が開けた。

目の前は大きな湖だった。陽光を浴びた水面が風を受けて柔らかくさざめき、美麗にきらきらと輝いている。遠目から見ると、ちょうど三日月の形になっているのがなんとなく分かった。

ふと横に目をやると、井戸がポツリとたたずんでいた。石造りの大きなもので、朽ちかけた姿からかなり古いものだとすぐに察しがついた。僕は好奇心にかられて中を覗き込んだ。昔から、よく穴の中を観察したがる癖があった。

井戸の底は陽の明かりさえ届かない暗闇だった。

「……まさか」

初めは脳裏をよぎっただけの小さな不安だったが、穴の底を見つめていく内、不安は恐怖へ変わっていった。まさか、真理華は井戸に落ちたんじゃ？

「真理華？」

僕は井戸の中へ呼びかけた。声は小さく響きながら闇に落ちていった。アゴを伝った汗の粒がその後を追った。

「妖精さん」

僕は飛び上がった。振り返ると、湖を背に真理華が立っていた。腕をピンと伸ばしたまま、カメラを僕に向けている。

「どこ行ってたんだ？ 探したじゃないか」

僕は冷静に詰め寄った。プライベートでも学校でも、クールに決

めるのが僕のやり方さ。そうでなけりゃ、今頃驚いた拍子に井戸へ落っこちてる。

「妖精さん」

真理華は繰り返した。僕は真理華のデジカメを受け取り、撮影した写真の一枚を画面に表示させた。つい今しがた撮影されたものでそこには井戸を覗き込む僕の情けない後ろ姿が写っていた。

「妖精じゃない。僕だ」

僕は僕を指差しながら指摘した。

「妖精さん」

真理華の差す指先は画面の右下、井戸の周囲を飛ぶ二匹の白い蝶々だった。

「チョウだよ。妖精じゃない」

言いつつ、僕にはこれが蝶々じゃないと分かっていた。その二つの後ろ姿は妙に白く輝いているし、トンボのように細長い羽を持っている。羽の下から伸びているのは人の足ではないか？

僕はもう一度井戸の傍へ歩み寄り、謎の生物を探した。途中、自分のやってることのバカバカしさに嫌気がさした。

僕は幽霊の類を一切信じていない。UFOも火星人も、ツチノコだって信じない。そんなもの、夢見がちな現実逃避者がうつつを抜かした末のしがない産物だ。くだらない。

「いいか、真理華。目に見えるものだけを信じればいいんだ」

真理華は頬を膨らませるばかりで、何も答えなかった。僕は無視した。

「そのカメラやるよ。誕生日プレゼントだ」

今日がなぜ特別かという、つまり、そういうことなのだ。

「僕はここでスケッチするから、真理華はその辺で妖精でも追いかけてな。もしかしたら、バースデーパーティーを開いてくれるかもしれないぞ」

僕が湖相手にスケッチを始めると、真理華は時たま忙しく走ったり、カメラを構えたりしながら、僕の前を右往左往した。やれやれ。真理華には本当に妖精が見えているらしい。おめでたい奴だ。

二十分もすると、僕の隣には同じくスケッチに励む真理華がいた。僕が一枚ちぎってやった用紙に、独特の鉛筆さばきで湖の絵をこしらえている。

僕らは持ってきたおやつやジュースを飲み食いしながら、湖のほとりで気ままな時間を過ごした。僕は別アングルでもう二枚湖をスケッチしたし、真理華は結局カメラを持って走り回るのに夢中だった。

帰り際、僕は真理華のスケッチを見てゾツとした。湖面の上に描かれるのは、無数の『妖精さん』だった。

駅へ戻る頃にはもうすっかり陽が傾いていた。空全体はたそがれのオレンジに染まり、雲は夕陽に溶け込むようにして細い筋の群れを成している。

駅構内に駅長さんの姿はなかった。僕はいつものように、手慣れ

た感じで二人分の切符を購入した。券売機から吐き出された切符を見て、僕は目を疑った。出てきたのは青い切符だった。

「いつもはオレンジだろ？」

気付くと、僕は切符に語りかけていた。無論、応答なし。印字も裏面もいつもどおりなのに、なぜか色は青なのだ。僕は納得がいかなかったが、時間ももうわずかだ。

眠そうな真理華の腕を取り、僕は改札を抜けた。

ホームにも駅長の姿はなかった。いったいどこへいったんだ？

この青切符のことを聞きたかったのに。切符を色々なアングルから観察していると、真理華の腕が一瞬スシリと重たくなった。

「眠い？」

重たそうにまぶたをパチパチさせながら真理華はうなずいた。同時に、膝がガクンと折れた。

「あともうちよい……ほら、来たぞ！」

ドアが完全に開ききる前に、僕らはもう車両に乗り込んでいた。中はガラガラ、人っ子一人いやしない。真理華は席に尻を据えるや否や、死んだように眠りについた。僕のあげたカメラを大事そうに抱えている。

「僕がついてる」

パパのことを考えながら、僕は虚空に呟いた。僕らを乗せて、電車は夕闇の中を走り出した。

「パパが何と言おうと、僕は真理華を見捨てたりはしない。僕にとって、君はかけがえのない兄妹だから……誕生日おめでとう、真理華」

意識が遠のくのが分かった。次にはもう……

響き渡る金属音と、尻を突き上げる強い衝撃で僕は目が覚めた。体は前のめりに吹っ飛び、前方の座席に頭からダイブした。痛みにもがく暇はなかった。

「嘘だろ……」

窓の外は朝焼けに染まっていた。どこか見覚えのある草原が車窓の向こう側に広がっていて、湿った空気が葉を濡らし、朝の陽射しを浴びて美しくきらめいている。

僕は窓から車内へと視線を流した……真理華がいない。

「終点、井戸の底。終点、井戸の底。切符を拝借。お降りのお客様、お忘れ物のないよう、ご注意ください」

背後から男の声が聞こえてきた。拡声器を使っているのか、やたらと反響してうるさい。しかも、段々と近づいてくる。

「この列車は、間もなく無人回送列車となります。お降り遅れると、とんでもないことになってしまいますよ。ですから……さあ、切符を拝借！」

すぐ目の前に腕が伸びてきて、僕は驚いて窓に張り付いた。見上

げるとそこに、駅長が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6324j/>

多久真の見た世界

2010年10月28日02時52分発行